

第5章 社会参加支援

若年性認知症の人の居場所を確保することにより、本人が介護者やボランティア等の「家族以外の人」と交流することができ、本人の孤立感の解消にも繋がります。また、家族と距離を置くことになるので、家族の身体的、精神的な休息を確保し、生活のペースを保つことにも繋がります。

1. 居場所の確保 : 定期的に継続して通える場所を作り、馴染みの関係を作る。
2. ボランティア活動 : 能力や体力を発揮できる場所として活用する。

本人の気持ちをきちんと受け止めてボランティアを提案してください。

1. ボランティアの事例

若年性認知症の本人がボランティア活動に参加したり、ボランティアの利用することは大切なことです。本人が社会参加をするための支援メニューやボランティアの利用事例をご紹介します。

(1) 事例1：介護サービスを利用する

若年性認知症の人への支援

①内容

一部の認知症対応型通所介護等の介護サービス事業所では、社会参加の意識が高い若年性認知症の人に対応するプログラムとして、保育所等における清掃活動等のボランティア活動を行うなど、社会参加型のメニューが実施されています。就労を希望する人を対象に、依頼を受けた事業所の紹介で現地に行き、事業スタッフのフォローを受けながら活動を行います。

②ボランティア活動の謝礼を受領する条件

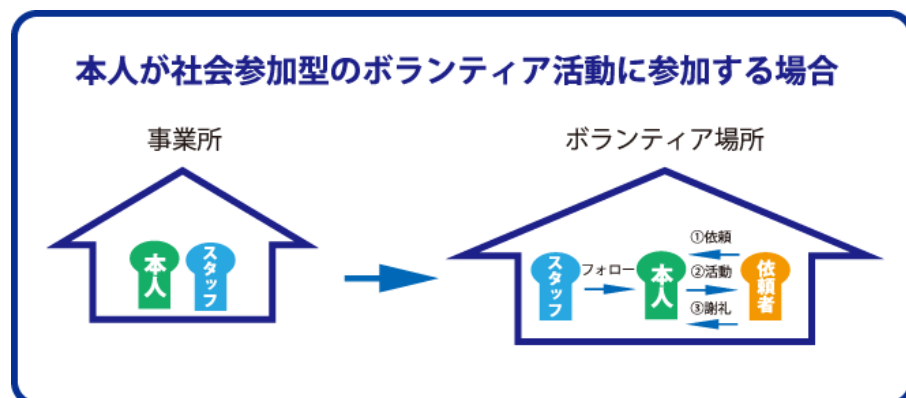
ボランティア活動の謝礼は、次の要件を満たす場合に限り、本人に渡しても差し支えないと判断されます。

- ・当該謝礼が労働基準法第11条に規定する賃金に該当しないこと

労働基準法第11条

この法律で賃金とは、給料、手当、賞与その他の名称の如何を問わず、労働の対償として使用者が労働者に支払う全てのものをいう

- ・社会参加型のメニューを提供する介護事業所において、介護サービスを利用する介護事業所において、ボランティア活動を遂行するための見守りやフォロー等を行うこと



(2) 事例2：本人がボランティアを受ける例

桜の森白子ホームの社会貢献活動の例

現在、特別養護老人ホーム桜の森白子ホームでは、「家族みまん。」というサロンを毎月第2日曜日に開催し、鈴木医療科学大学に学生と協働で運営しています。

① 概要

認知症になっても住み慣れた地域で、その人らしい生活ができるように応援・協力を行っています。

② 活動目的

- ・若年性認知症の方や家族の方に交流の場を提供し、その人らしい生活ができるように支援を行う。
- ・施設及び大学と地域の交流を深め、認知症になっても安心して暮らせる地域を目指す。
- ・認知症についての知識を深め、感性豊かで思いやりのある医療・福祉スペシャリストの育成を目指す。

③ 活動内容

午前：ウォーミングアップ（自己紹介・近況報告・体操・歌）

昼食作り・個別活動（手芸・カラオケ・卓球・散歩等）

午後：ボイストレーニングの先生による音楽療法

クールダウン（次回に向けての献立決め。振り返り）

通所介護利用後のスポーツ参加

利用者 A さん 男性 40代の若年性認知症の場合

活動内容

通所介護後、家族が帰宅するまでの間、大学に行き、大学生と共に得意であったスポーツを行う。Aさんが社会的役割（大学生に指導をする）を担うことにより、生活の中で本人らしい時間が少しでも持つことができるよう、大学生のボランティアによって支えられている活動です。



Aさん：最終的には指導はできなくなってしまったが、一選手として活躍される。また、自宅でも心身共に安定し、夜もぐっすり眠れているという報告も上げられた。

学生：認知症の理解も深まり、思いやりの気持ちが芽生え、人の心の痛みを理解し、皆が楽しめるように気配りが出来るサポーターとして成長している。

ちよつとご紹介！

地域の集まりも認知症の人の支えに

若年性認知症（アルツハイマー型）のAさん（50歳）

自宅で85歳になる父親と二人暮らし

父親は次々と起こる問題に困惑しながら、なかなか認知症の理解ができず、Aさんに罵声を浴びせる日々が続き、Aさんも元気をなくしていました。

デイサービスでの利用をはじめAさんの居場所づくりを考える中で日中の過ごし方をお聞きすると、毎日知人宅で過ごしているとのことでした。その知人Bさん（90歳女性）宅を訪ねると、そこは近所の高齢者が集まるサロンのような場所になっていました。出会いは1年ほど前、マッサージ機の無料体験コーナーで知り合いAさんがBさん宅の庭の木を切ってあげたことがきっかけで、昼ご飯を食べていないというAさんにインスタントラーメンを作ってあげたのが始まりだったそうです。

その後、Bさん宅でBさんの友人たちとも仲良くなり、お昼ご飯を食べることが日課になりました。Aさんの様子がおかしいことは分かっていましたが深く聞くことはしませんでした。子どもが遠方にいるBさんは自分の息子がもし困っていたら、周りの人に助けをもらいたいと思うから、Aさんのことを気にかけて、周りの友人たちも一緒に自然に接していました。知り合った当初は硬かったAさんも表情も徐々に明るくなっていきました。

また、そこで知り合った民生委員さんの配慮で月1回開催している地域のサロンにも招待してもらいました。デイサービスを利用しない日は日中Bさん宅で過ごすAさんは、父親や隣に住む伯父夫婦にも理解されていました。迷子にならないように近隣や警察にも連絡し、半年ほどデイサービスとサロン、Bさん宅に通いましたが、迷子になることはありませんでした。その後、父親が亡くなりグループホームへの入所を余儀なくされましたが、集団生活にも馴染み、現在は従兄弟が成年後見人となり、穏やかな生活を送り笑顔も見られています。